

2019年から始まった「ナガサキ映画と朗読プロジェクト」は、今年6回目を迎え、7月20日(土)、21日(日)、長崎原爆資料館ホールで行われます。

このプロジェクトの起源は9年前にさかのぼります。2010年7月に国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の主催で「長崎国際平和映画フォーラム」がスタート、国内外のさまざまな映画上映と製作者を招きました。そして、13年から、そのフォーラムの中で地元長崎の皆さんによる朗読披露が始まりました。そして、13年から、そのフォーラムの中で地元長崎の皆さんによる朗読披露が始まりました。市内の高校放送部の生徒が合同で朗読するスタイルは今に続いています。

フォーラムが18年で終了したのを受け、取り組みを継続しようと始めたのが私たちのプロジェクトです。

今回上映する映画は「サイン

ト・フォールアウト」(2023

ナガサキ映画と朗読プロジェクト

20、21日 原爆資料館ホール



映画監督 稲塚秀孝
寄稿

「核はいらない」今こそ伝えたい

年、伊東英朗監督)と「二重被爆」(2006年、青木亮監督)の2本。前者は、米国ネバダ州で行われた100回に及ぶ大気圏内核実験により被曝した人々の実態に迫った作品。後者は、広島と長崎で続けて描かれた「二重被爆者」を初めて描いた作品で、アメリカ、フランス、中国の人々の反応を加えています。

私は、その二重被爆者で語り部活動に精力的に取り組んだ故山口彌さんを05年から取材しました。93歳の誕生日(09年3月16日)のインタビューに、山口さんは「人間の世界に核はいらない」と話しました。「結論すれば、核を平和的に使うと言いますが、平和的に利用すると言つても、技術的

に問題があつて、爆発したりする、核は人間の世界にあつてはいけないもの、核がなくならなければ、人類が滅亡に近づいているというふうに私は思つていています」と。

山口さんはその年の夏に入院し、半年後に亡くなりました。先の言葉は、渾身の訴えだったに違いないと思います。山口さんの遺志と受け止めて、プロジェクトの標語に掲げています。

映画上映のほか、今回の朗読は14組。山里小学校、淵中学校に加えて深堀中学校が参加します。

初めての試みとして「被爆と戦争をどう伝えていこうか」をテーマに、被爆の方と学生2名のト

に問題があつて、爆発したりする、核は人間の世界にあつてはいけないもの、核がなくならなければ、人類が滅亡に近づいているというふうに私は思つていています」と。

私は7月2日から5日にかけ、被爆者の体験を語り継ぐ「交流証言者」として、大阪府八尾市の中学校7校で講話をさせていただきました。山口さんの2度の被爆を取材した5年間の濃密な日を思い出しながら…。

ある小学校で話した後のことでした。6年生の一人が手を挙げて、「山口さんのお話を聞いて、両親や周りの人伝えたいと思いま

た。今日はありがとうございました」と言うのです。まるで、奇跡のような言葉に遭遇して、私もまんざらでもないな、と感じました。(ナガサキ映画と朗読プロジェクト実行委員会幹事)

ークを舞台で繰り広げます。来年被爆80年という大きな「節目」を迎える今、喫緊の課題である「被爆体験の継承」を考えるうえで、新たなチャレンジではないかと位置付けました。